

<p>事例 監査制度の充実</p> <p style="text-align: center;"><b>監事監査の取組み</b></p> <p style="text-align: right;">～京都大学～</p>	<p>本事例の中心人物</p> <p>監事</p> <p>監査室</p>
---	--------------------------------------

**事例内容**

**【概要】**

京都大学では、常勤と非常勤の監事それぞれ1名が選任され監査業務にあっている。主な業務は毎月実施される月例の監事監査で、結果についてはその都度総長に報告がなされている。また、報告書はホームページに掲載するなど広く情報の公開が進んでいる。

**【背景】**

国立大学法人の監事は文部科学大臣に指名されるなど、社会から非常に強い要請を受けて置かれているものであり、社会に対する責任を果たさなければならない。このような中、監事の特に業務監査に対する注目が集まっており、同大学でも監査部門との連携を含めた監事監査体制が整えられた。

**【取組み内容】**

監事の役割について理解を深めるため、カリフォルニア大学システムの事例を研究した。カリフォルニア大学システムではホームページ上にも資料を掲載しているが、経験が蓄積されており非常に参考になった。

業務監査の手順としては、事前に対象部署へのアンケートを実施し問題点を把握、その後現地調査を行い、結果について双方で確認するという流れを取っている。現地調査では監査部署とも連携しているが、内部監査は大学独自の判断で動くものであり監事監査とは性質が異なるため、お互いの領域については明確に線引きをしている。

業務監査で最も重要となるものは学内からの信頼である。その信頼を得るためには、現地調査に基づく適正な意見の表明が必要であり、現地調査には特に力を入れ情報も積

極的に公開している。

情報交換については、監事、監査部署、公認会計士、担当理事が参加する4者協議を設けているが、学生からの意見を聞くために監事はキャンパスミーティング等にも積極的に参加している。

監事監査で指摘された事項については、内部監査部署が取組み状況を調査しフォローアップを行っている。

**【結果】**

部局のレベルで問題として認識されていることが監事監査を通じて表面化し、大学全体としてアプローチすることが可能となっている。

監事監査と内部監査は、監事監査が問題を発見する役割、内部監査が監事監査によって発見された問題をフォローアップする役割という具合に連携しており、監事監査の結果、事務組織の改革が行われるなど、組織の活性化にとって非常に重要な役割を果たしている。

**成功のポイント**

監事監査に対する学内の協力

- ・総長の監事監査に対する理解・期待のもとに、監事は監査室（内部監査など）との協力体制をとりながら、互いに有効性を向上させている。

問題点の指摘だけではない監査

- ・問題点の指摘だけではなく、提案を同時に行い、例示的な解決案を提示している。

学内における共通課題の認識向上と組織的な取組みの促進

- ・監事監査により、共通課題として学内全体が認識するようになり、問題の解決に対する組織的な取組みが促進されるようになった。監事は学生との対話にも積極的に参加している。

学内の信頼関係の構築と監査内容の信頼性の確保

- ・監査の情報開示、監査前の事前アンケートの実施により、学内の信頼関係の構築に努めていた。
- ・監査結果の正式報告前に、監査後の確認事項を現場へフィードバックすることにより、審査の信頼性を確保していた。

毎月臨時監査によるフォローアップと実効性の確認

- ・監査の実効性を高めるうえで、フォローアップのスピードを重視し、今年度からテーマごとに毎月監事監査を実施していた。

監事監査結果の学外への積極的な開示

- ・ホームページでの「監事ノート」等にて、監査結果を積極的に学外にも開示することが、業務の健全性の公表、社会に対しての説明責任を果たすことに繋がるとの意識がある。

な更なる監査の充実を図っていく。

監事の任期・権限の問題

会計監査に必要な財務諸表等は、翌年度の5月末日までに作成することになっているが、監事の任期は年度（4月から3月）で定められているため、在任中に財務諸表を監査することができない仕組みになっている。これでは、会計監査に対する責任が果たせないため、国による国立大学法人制度の改善の必要性が感じられる。

### 委員の所感

監事監査に対し、大学の発展のために全学で協力する意識や体制が作られている。監査の実効性を重視し、適時なフォローアップに努めている。

また、学内外に積極的に、監事監査情報を開示することで、監査の説明責任を果たしており、ガバナンスの透明性の向上につながっている。学内の職員や学生からの期待感も出てきているものと思われる。

大規模大学における監事監査が、どのような手法にて実効性や信頼性を高めていくのかについて、さらなる模索が続けられるだろう。

### 今後の課題

監査需要への対応

実施監査に重点をおいた監事監査に対する学内の需要に対し、人員の不足などの様々な要因のため十分には対応しきれていない。

さらなるフォローアップの充実

監査のフォローアップを充実（手法も含め）させることで実効性を高め、第三者的な立場から学内の改善に向けて議論するよう